

中国における「3+X」試験方式の導入：山東省の 「基本能力テスト」を中心に

申， 田

九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻：修士課程

<https://doi.org/10.15017/7376523>

出版情報：国際教育文化研究. 9, pp.151-161, 2009-07-07. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



中国における「3+X」試験方式の導入

— 山東省の「基本能力テスト」を中心に —

申 田

1. はじめに

近年の中国において、大学入学試験制度である「高考」は、内容、科目、方式など面において大規模な改革が進められており、現在までにいくつかの成果がみられたが、それとともに、新しい問題点と矛盾が現れ、それらの問題を解決するにはまだ長い年月を要するといわれている。¹

1999年6月、改革開放以来の第三次全国教育工作会议が開かれ、「中共中央国务院が教育改革を深化し全面的に素質教育を推進することに関する決定」において、試験と評価制度の改革を推進し、「一つの試験が生涯を決める」²状況を変えなければならないとされた。「高考」制度の改革は、中小学校³が全面的に「素質教育」の実施を推進することにおいて重要な措置として位置づけられ、大学側の入学者選抜の際の視点、中等学校における「素質教育」の推進、大学の入学者選抜における自主権の拡大に貢献するという三原則に従い、積極的に「高考」制度の改革を推進しなければならないとされた。⁴

その結果、同年に、教育部は新しい大学入試科目の組み合わせである「3+X」試験方式を打ち出し、2002年にはそれを全国に普及させた。この試験方式の改革は、前述した三原則の後者の二点に特に関連があると注目された。第一に、「3+X」試験方式は、現在の中国社会において深刻な問題となっている受験偏重型の教育である「応試教育」から、生徒の実際の能力と素質⁵の向上を目指す「素質教育」へと転換させるための推進力として位置づけられる。第二に、この試験方式を採用することにより、各大学は独自に「X」を指定することが可能となり、その結果、各自の個性と特性を入試に反映させ、より効果的に「合う生徒」を受け入れることができるということである。⁶

以上の状況を踏まえ、本研究は、1998年以来、中国において導入された「3+X」試験方式と呼ばれる全国統一大学入学試験制度について、改革導入時から現在までの各省の科目の設置状況、各科目の得点の割合、評価の基準などの変化と各省の特徴を分析する。とりわけ山東省において、この新しい試験方式の「X」の一つとして2007年に「基本能力テスト」⁷を導入された。

「基本能力テスト」とは技術、芸術、体育・健康、総合実践活動、人文・社会、及び科学の六つの科目の知識に関する総合問題である⁸。本論文はについて、この試験の導入背景と現在の実施状況を明らかにし、また、80年代半ばから提唱されてきた「素質教育」との関連について考察

することを目的とする。

2. 政策的文脈

2.1 中国における大学入学試験

1952 年 6 月 12 日、教育部が出した「全国高等教育機関一九五二年暑期新入生募集に関する規定」で、全国すべての高等教育機関（教育部から許可された一部の学校を除く）は全国統一で行われる新入生募集活動に参加しなければならないと定めた。ここで述べる「統一」の生徒募集というのは、「統一計画・統一指導・統一命題・統一応募・統一筆記試験、統一採用」などのことである。

1952 年における大学統一入試は高校教育課程のすべての科目を含め、大学側は専門によって各科目の点数を特定の割合で組み合わせ、採用の参考とした。しかし、この試験制度は「文化大革命」のため、1966 年から 1976 年までの十年間において、廃止された。

1978 年 5 月、教育部から「1978 年高等教育機関生徒募集に関する意見」が発表され、78 年度の入試が中央の教育部が出題する全国統一問題で、同一日時に行うことが公表された。これ以降の年度の生徒募集の基本的パターンができあがったように思われる。以下、募集要項の筆記試験を例として、各年の変化も含めて見てみることにする。

1977 年から再開した「普通高等院校招生全国統一考試」はその名の通り、統一試験問題で、同一の時間に統一の試験を行うことである。

- 一、 統一時間：1978 年から 2000 年までの「高考」はほとんど 7 月 7 日から 9 日までに行われていたが、暑い気候が受験生の能力の発揮には悪い影響を与える恐れがあるため、2003 年から 6 月 7 日に繰り上げられた。
- 二、 統一試験問題：筆記試験で使われる問題は 1977 年以降、毎年教育部が任命する各教科の専門家によって出題されるが、その中には大学教員、中学校教員、中学校のテキストの編集・審査担当者の三者が含まれる。
- 三、 統一試験方式：試験の各科目の組み合わせ方や各科目の点数の割合などは毎年大きな変化が見られる。この流れは、以下のようにになっている。⁹

表 1：中国における統一試験方式の変遷

1977	文：政治、国語、数学、史地（歴史、地理） 理：政治、国語、数学、理化（物理、化学） 外国語専攻の希望者のみ外国語の試験を受ける
1978	文（哲学、外国語を含む）：政治、国語、数学、歴史、地理、外国語 理（医学、農学を含む）：政治、国語、数学、物理、化学、外国語 外国語は英、ロシア、仏、独、日、スペイン、アラビア語の中で選ぶ 外国語の点数は外国語専門の希望者以外の場合参考になり、外国語専門を希望する場合は、口頭試問も受け、筆記試験の点数を総点数に記入、数学は参考となる
1979	文（外国語を含む）：政治、国語、数学、歴史、地理、外国語

～ 1986	理（医学、農学を含む）：政治、国語、数学、物理、化学、外国語・生物 外国語は英、ロシア、仏、独、日、スペイン六つの中から一つを選ぶ 生物の試験の満点は 70 点となる。
1987	上海で「3+1」試験方式が行われる。 「3」は共通科目の国語・数学・外国語で、「1」は残りの 6 科目から大学の要求に基づき 1 つである。
1988 ～ 1990	上海以外の省・市・自治区 文（外国語を含む）：政治、国語、数学、歴史、地理、外国語 理（医学、農学を含む）：政治、国語、数学、物理、化学、外国語・生物
1991	「3+1」提案を提出し、湖南・雲南と海南三つの省で施行する
1993	北京で「3+2」試験方式を試行する。
1994	「3+2」方式の試行は全国にまで拡大する。
1995	上海を除き、全国で「3+2」試験方式を実行することとなる。

1993 年、国家教育委員会が許可した上で、北京は率先して「3+2」試験方式を試行し、そしてこのような試験方式は 2001 年まで実行された。「3+2」の 2 は理科系の物理・化学と文科系の歴史・政治である。1994 年、「3+2」方式の試行は全国まで押し進められ、1995 年以後、「3+2」試験方式は上海を除き、全国で実行されることとなった。¹⁰

2.2 「3+X」試験方式

1998 年、教育部は「素質教育」を推進するため、新たに「高考」改革に着手し、1999 年に「教育改革を深化し、全面的に素質教育を推進することに関する決定」¹¹を出した。

この文書によれば、新しい「高考」改革の「指導思想」、すなわち理念は、(1)高等教育機関による人材選抜に役立つこと、(2)中等学校の「素質教育」、すなわち受験準備教育でなく、生徒の素質ないし資質の全面発達を目指す教育の実施に役立つこと、(3)高等教育機関の運営自主権拡大に役立つこと、の三つを堅持することである。具体的施策としては、第一に、入試科目の多様化を図り、三年程度の時間をかけて、後述する「3+X」の方式を推進する。第二に、試験内容を改革し、受験生の知識量ではなく、能力や素質の測定に重点を置き、出題範囲は中等学校の教学大綱を遵守するが、それに拘泥することなく、応用力や実践能力をみる問題を増やす。第三に、入試の形式については、現行の年一回の全国統一試験を暫時変更することはないが、年間二回の試験実施を積極的に検討する。第四に、合否判定方法の改革では、コンピュータを利用した判定を実施する、というものであった。¹²

ここでいう「3+X」試験方式の「3」は必須科目の国語・数学・外国語で、「X」は高校課程の中で選ばれた一科目またはいくつかの科目（総合科目を含める）である。

1999 年に、広東省は率先して「3+X」試験方式の改革を行い、2000 年には山西、吉林、江蘇、浙江を含める五つの省まで拡大し、2002 年に全国で実行することとなった。

2.3 「基本能力テスト」導入までの流れ

2001 年、教育部が出した「基礎教育課程改革綱要（試行）」において、中国の基礎教育課程は時代の需要に順応することができなくなったという現状が指摘され、「中共中央国務院の教育改革を深化し、全面的に素質教育を推進することに関する決定」（中発[1999]9 号）¹³と「国務院の基礎教育改革及び発展に関する決定」（国発[2001]21 号）¹⁴を貫徹するために、基礎教育課程のシステム、構造、内容を調整・改革し、素質教育の需要に適応する新しい基礎教育課程システムを構築することが決められた。

この改革の目標は新世紀に向け、全面的に素質教育を推進し、時代の要求に応じる「四有」¹⁵の人材を育成することであり、改革のキーワードとしては、社会的責任感、初歩レベルの創造性、実践能力、科学及び人文の素養、環境意識、生涯にわたっての学習が必要な基礎知識・基本スキル及び方法、身体健康及びメンタル面での素質、健全な審美眼及び健康的な生活方式などが含まれる。具体的に言うと：

- 知識伝授を重視する傾向を変え、基礎知識と基本スキルを学びながら、学習の方法を学ぶこと。そして正しい価値観の形成もできるように、積極的な学習態度の育成を強調する。
- 学科過多、それぞれの学科を重視し、学科間のつながりを無視する現状を変え、異なった地域と生徒の要求に応じるバランスよく、総合性と選択性のある、一貫した学科と時間割の調整を目指し、総合科目の設置に力を入れる。
- 従来のカリキュラムの中の「難、繁、偏、旧」の内容とテキスト中心の現状を変え、カリキュラムの内容と生徒の生活及び現代社会、科学の発展とのつながりを強化し、生徒の学習意欲に関心を持ち、生涯学習が必要な基礎知識とスキルを探し出す。
- 従来の受動的学習、暗記型学習と機械的訓練の現状を変え、生徒が自発的に学習に参加することを勧め、生徒の情報を収集・処理する能力、新しい知識を獲得する能力、問題を分析・解決する能力、そしてコミュニケーションと協力の能力を育成する。
- 知識評価の選抜機能に対する重視を変え、生徒の達成と教師の育成の機能を発揮する。¹⁶

この「基礎教育課程改革綱要（試行）」においては、さらに、試験制度に対する改革と改善について発表された。

・・・高等学校の入試制度改革は基礎教育課程改革と結び付けなければならない。高等教育機関による人材選抜、中等学校の「素質教育」、そして高等教育機関の運営自主権拡大に役立つという原則に従い、生徒の能力と素質に対する評価を強化し、入試の内容を改革し、一発勝負ではなく、複数のチャンスを与えることと、生徒と高等教育機関両方の意思を重視することを可能にする、総合的な評価・選抜方式を探し出す。¹⁷

2004 年、広東、山東、海南、寧夏の四つの省が率先してこの基礎教育課程改革を着手し、そ

れぞれ 2007 年に新しいカリキュラムに対する試験を行った。試験方式から見ると、寧夏省はほぼ従来の「3+文科総合あるいは理科総合」方式を継続し、海南省は「3+3+基礎会考」（二つ目の「3」は文科の政治・歴史・地理もしくは理科の物理・化学・生物であり、「基礎会考」は文科に物理・化学・生物・通用技術・情報技術を、理科に政治・歴史・地理・通用技術・情報技術を受けさせる）という試験方式を行った。広東省は「3+文科基礎あるいは理科基礎+X」（「X」は物理・化学・生物・政治・歴史・地理・音楽・美術・スポーツの九つの科目から任意の一つを選ぶ）で、初めて音楽など選択科目を試験範囲に入れたが、それもやはり各学科の知識の範囲を越えることができず、一つの学科を生徒に選ぶことによって、知識の偏りを招く可能性がある。一方、山東省が打ち出した「3+文科総合あるいは理科総合+1」試験方式はある程度そのような問題を避けることができると言われた。¹⁸この「1」は「基本能力テスト」、すなわち、高校課程における技術、体育、健康科学、芸術、実験及び生活・社会問題の解決能力を評価するために考案されたものである。

3. 「基本能力テスト」の科目設置、評価基準（方法）

3.1 試験問題作成における理念

2008 年 3 月に、山東省招生委員会命題弁公室が出した『2008 年普通高等学校招生全国統一考試（課程標準実験版）山東卷考試説明』において、この新しい試みについての説明がなされている。

- 基礎性：
試験問題の構成は、受験生が持つべき社会生活に適応するための最も基本的な知識、基本技能、学習能力、実践能力および価値観である。
- 整合性：
いくつかの問題を組み立てて一つの大問を作り、学習領域と学科の境界を越え、あるテーマをめぐって一定の領域と学科知識に対して考査する。
- 柔軟性：
受験生の多面的思考と革新能力に対する評価に重点を置き、答えは一定の柔軟性と多様性を持つように出題すべきである。
- 時代性：
試験問題は受験生の日常生活や、学習生活と密接に関連し、時代の変化を反映すべきである。

3.2 「基本能力テスト」の試験問題

2007 年の「基本能力テスト」を見ると、54 の試験問題を含む 11 の大問があった。試験は生活と社会实践など側面を通じて、六つの学科領域に関する知識、能力、素養、感情そして価値観など要素の総合的な考査を目指した。

Part I は人文芸術、体育と健康、そして生活にある科学などに関する選択問題であった。

Part IIの8つの大問は科学の発展、創造性、多様性そして芸術や価値観などに関する知識を
 考査する。例えば、大問7は多様性に関する問題であり、冒頭には次のような記述がある。「一
 つの音符で優美な旋律を表わすことができず、一つの色だけで美しい絵を書くことが難しい。
 自然と文明の現実のあり方として、多様性は保護され、尊重されるべきである」。この大問の中
 に、第32、33、34問は文化、文明の多様性、第35、36問は生物の多様性についての問題が含
 まれていた。

例：34. 明代の著名な園芸著作『園冶』において提言された造園芸術の理念は「人間が作った
 ものとはいえ、自然でできたような」であったが、17世紀フランスの著名な造園芸術
 者である Le Notre は「バランスよくという法則を自然が受け入れるように強制する」
 と主張した。この二つの理念に基づき、以下の写真の中で、中国古典造園芸術の特徴
 を持っているのを二つ選びなさい。



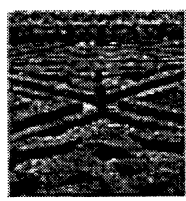
A



B

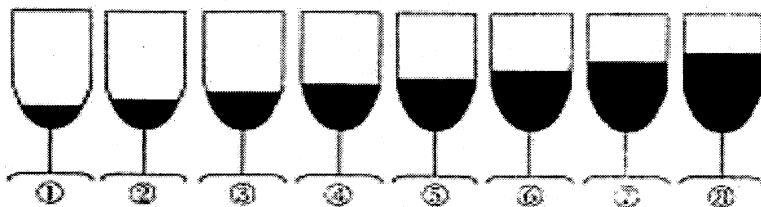


C



D

42. 王さんの誕生日パーティで、小華は8つのグラスで「水ピアノ」（下の図）を作って彼
 に誕生日の歌を演奏してあげた。この「水ピアノ」の音階（低から高）は____から____で
 あり、その理由は_____。そして小華はグラスの中の水をジュ
 ースに入れ替え、「ジュースピアノ」を作って同じ曲を演奏した。今回の音は前回より
 重厚であった。その理由についても述べなさい_____。



45. 中国青年ボランティア組織はたくさんの公益活動を行った。中
 国青年ボランティアのロゴは(右の図)____、____、____の
 三つの要素で構成されるが、このロゴの意味を述べなさい_____。



さらに、試験問題の内容において時代性、科学性、多様性などを重視する上に、経典を引用
 したり、山東省の文化の特徴に注目をしたりする傾向も見られた。

3.3 「基本能力テスト」の評価基準（方法）

- 筆記試験、120 分
- 満点は 100 点で、実際の点数の 60%を総点数に記入する
- 問題は Part I と Part II に分ける

Part I：選択問題、30 問×1 点＝30 点

Part II：いくつかの大問、選択・記述・デザイン¹⁹などの問題、70 点

4. 「基本能力テスト」と「素質教育」の関連

4.1 「素質教育」

「素質教育」という言葉がはじめて使われたのは、1985 年 5 月 9 日、鄧小平が全国教育工作会议において「わが国の国力の強さ、そして経済発展力の大きさはますます労働者の素質、知識層の質と量に関わる」と発言したことに端を発する。²⁰その後、1985 年 5 月 27 日には、「中共中央教育体制改革に関する決定」において、「全ての教育体制改革の過程において、改革の根本の目的は民族の素質を高めることであり、人材が多ければ多いほど育成に熱心に取り組まなければならない」と指摘され、さらに 1988 年 2 月、『人民教育』は「労働者の素質を高めるのは基礎教育の根本的な任務」というテーマの記事を、1988 年 11 期の『上海教育（中学校版）』は「素質教育は中等教育の新目標」という記事を掲載した。90 年代に入ると、素質や素質教育に関するものは既に教育界の主要な議題になっていた。²¹

素質と「素質教育」についての明確な定義はまだ出されていないが、石薔²²は素質を次のように定義している。「素質の概念は広義と狭義に分けることができる。狭義の素質は生理学と心理学上の概念であり、すなわち個人が生まれつき持っていて、性格や能力などのもととなる心的傾向である。広義の素質は教育学上の概念であり、すなわち生まれつきのものではなく、生まれてから環境の影響と教育訓練によって習得した内在的で、長期間効果をもち、比較的安定している品質構造であり、道德素質、知識素質、身体素質、審美素質、そして労働技能素質などが含まれる」。以上のことから、「素質教育」に含まれる素質は広義の素質であるといえる。

「素質教育」の特徴については、国家教育部「中小学校において『素質教育』の実施を推進することに関する意見」²³において、以下のように言及されている。

「素質教育」は民族素質の向上を主旨とする教育であり、『教育法』に基づいて定められた国家の教育方針である。「素質教育」の基本的特徴は、全ての生徒を対象とし、全面的に生徒の基本素質の向上を目的とし、教育を受ける人の態度・能力の養成に重点を置き、彼らが徳、智、体の三つの面において、自発的に発展することである。そして「素質教育」を実施するかぎとなるのは、教育評価制度と人事制度改革である。²⁴

以上のような「素質教育」と対照になるのは「応試教育」と呼ばれる教育モデルであり、石薔の定義によると、「応試教育」は「わが国の教育実践において存在している、教育を受ける人と社会発展の需要から逸脱した、一方的で受験志向の、高い点数と進学率を求める傾向である」。

石薺は「応試教育」と「素質教育」の特徴の違いを以下のようにまとめている。²⁵

表 2：「応試教育」と「素質教育」の特徴

	応試教育	素質教育
目的	点数と選抜に重点を置き、高い点数によって進学資格を取得する	教育を受ける個体と社会発展の需要によって国民の素質の向上を求める
対象	成績の良い生徒を重視し、大部分の生徒と成績の悪い生徒を軽視する	全ての生徒に発展するチャンスを与え、平等、そして個々の生徒の個性の尊重を求める
内容	試験と進学の需要に従い、試験内容だけに力を入れ、能力の養成を軽視する	生徒と社会の発展の需要に基づき、実際の問題を解決する能力を教える
方法	「題海戦術」 ²⁶ 、受験学習、補講などにより、生徒の負担が重くなり、全面的な能力の養成がされていない	生徒の長所と潜在能力の開発を重視し、生徒の学習意欲を高める。
評価基準	教育の全てが試験を中心とし、試験の点数が生徒と教師の能力を評価する唯一の基準とする	多様な手段で全面的に生徒の素質と教師のレベルを評価する
結果	多数の生徒が軽視され、学習意欲がなくなり、個性の発展が抑えられた。	全ての生徒の潜在能力を発揮させ、素質の全面的な向上、個性の自由な発展が期待できる。

4.2 「素質教育」と「基本能力テスト」

「素質教育」は人の持続可能で、全面的な発展に関連しており、「素質教育」における重要な特徴は、生徒の習得した知識を総合的に活用し、問題を発見、分析そして解決することである。従来の試験方式は分科試験であり、理論と実践、そして学科間のつながりにある程度触れていたが、ほとんどはそれぞれの学科の知識に対する考査であった。一方、現在の高等学校は科学精神と人文精神の調和を強調し、大学生の全面的な達成に注目している。「基本能力テスト」は高等学校における「素質教育」の実行と、自発的あるいは独自に学習することの出来る、創造性のある人材の育成に対して推進力の役割を果たしている。

具体的に言うと、「基本能力テスト」が導入されて以来、いくつかの特徴が見られる。²⁷

- 試験問題の形式と内容は柔軟性があり、そこでは暗記に偏重したテキストの学習より実際的・応用的学習のほうが重要である。
- 試験問題は単純な各科目の寄せ集めではなく、各科目の間のつながりを重視している。
- 試験問題の難易度から見ると、一見簡単な知識に基づく質問が多いが、簡単に解けるものであるとは言えない。
- 試験問題はいくつかの領域をわたって、幅広い知識を考査することを求めており、難易度をあげるために意図的に深い専門的な知識を考査することはない。
- 一部の問題は生徒の要約能力と推理能力を考査することができる。

- 「基本能力テスト」の受験学習においては、従来の「題海戦術」の効果がなく、普段の授業をしっかりと受けることが重要なので、これまでの選択科目が重視されていない状況を変える可能性がある。

これらの特徴は従来の試験方式と比較して、「素質教育」の理念に近づく傾向が見られ、「基本能力テスト」に対する改革もまた「素質教育」を果たすためのプロセスにおいて、不可欠な推進力となっている。

5. おわりに

2007年と2008年に、山東省の約160万人の受験生が「基本能力テスト」に参加した。2年間の試行において、様々な利点や効果が見られたが、いくつかの問題点も指摘できる。

- 「基本能力テスト」は普段の知識の蓄積を重視し、「基本能力」という授業を開くではなく、各科目を教学計画通りに行うことを求めている。²⁸しかし、実施から2年間も経たず、多くの学校に「基本能力授業」が次々と開講され、一部の学校では1年生と2年生に対して従来通りに選択科目を軽視し²⁹、3年生に「基本能力授業」の集中講義を開く場合もあった。したがって、「基本能力授業」に対して、専門の教師の不足と教師の育成の困難さなどの問題が出てくるだろう。
- 「基本能力テスト」の特徴とされている各学科を越える総合的な知識は、実際に授業で教えることが難しく、今まで一つの科目しかやっていない教師たちにとって困難な挑戦になっている。
- 「基本能力テスト」においては人文的、芸術的、そして文化的な内容が多く、感性的認識に適した文系や女子生徒は、理性的認識に適した理系や男子生徒より達成が容易となる傾向が考えられる。

政府は今後も試験科目の改革に取り組むことを予定しており、そこでは、「高考」の成績を主な指標として、能力の考查と総合的な素質評価を強調する試験方式を強化することが期待されている。このように、「基本能力テスト」について分析・評価することは、今後の改革の進展に貢献することにつながると考えられる。³⁰

今後の研究では、これらの問題点を実証するために詳細な調査を行い、「基本能力テスト」の現状と今後の動向について分析し、問題の解決策について検討する。

¹ 孫展「高考改革在兩難中緩步前行」、『中国新聞週刊』、2004(23)

² 原文は「一考定終身」である。

³ 小・中学校を指す。

⁴ 汪永紅「我国高考制度創新初探」、2004年、p. 10

⁵ ここでは、生まれつきのものではなく、生まれてから環境の影響と教育訓練によって習得し

た内在的で、長期間効果をもち、比較的に安定している品質構造であり、道德素質、知識素質、身体素質、審美素質、そして労働技能素質を意味する。

⁶ 金龍哲『『3+X』が教育を変えられるか——中国の大学入試改革の理念と現状』、時事通信社(編)『内外教育』第5373巻号、2003年3月、pp.2-3

⁷ 「測試」：日本語の試験という意味である。

⁸ 山東省招生委員会命題弁公室、『2007年普通高等学校招生全國統一考試(課程標準實驗版)山東卷考試說明』、2007年3月

⁹ 中華人民共和國教育部『教育部公文書』1977年～2002年によってまとめた。

¹⁰ 中華人民共和國教育部『教育部公文書』1977年～2002年

¹¹ 原文は「关于深化教育改革，全面推进素质教育的决定」である。

¹² 大塚豊『中国大学入試研究——変貌する国家の人材選抜』東信堂、2007年、p.226

¹³ 原文は「中共中央國務院關於深化教育改革全面推進素質教育的決定」である。

¹⁴ 原文は「國務院關於基礎教育改革与發展的決定」である。

¹⁵ 原文は「四有新人」であり、理想、道德、文化と規律の有る新たな人材という意味である。

¹⁶ 教育部「基礎教育課程改革綱要(試行)」、2001年6月7日

¹⁷ 教育部、上掲文書

¹⁸ 王坦(山東省教育招生考試院院長)、宋宝和(山東省高考命題弁公室教授)、「山東：新課程高考致力於全面實施素質教育」、『中国教育報』、2007年2月28日

¹⁹ 例えば、「提示された調査のデータに基づいて図表を描きなさい」や、「〇〇問題についてアンケート調査をする予定なので、アンケートの質問をいくつか考えなさい」など問題の形式がある。

²⁰ 「素質教育大事記」、『光明日報』、2005年10月12日

²¹ 姜守厚「我国的教育方針与素質教育」、『教育發展研究』、1999年

²² 石蕾「浅析素質教育」、中学数学網、2006年10月18日

<http://www.qyxk.net/Article/LiLun/szjy/200610/20061018184211.html>

²³ 原文は「關於当前積極推進中小学實施素質教育的若干意見」である。

²⁴ 「什麼是素質？什麼是素質教育？」、『光明日報』、2005年10月12日

²⁵ 石蕾、上掲記事

²⁶ 多くの問題を練習することによって試験準備をする、「応試教育」の典型的な受験勉強の手段と言われる。

²⁷ 袁寅生『基本能力測試』：新高考特色の体现』、『中国教育報』、2007年9月9日

²⁸ 山東省招生委員会命題弁公室、『2008年普通高等学校招生全國統一考試(課程標準實驗版)山東卷考試說明』、2008年3月

²⁹ 美術や、音楽の授業の時間を減ったり(例えば、週1回の授業の予定から2、3週間に1回に変える)、授業の時間に他の必須科目の試験を行ったりすることが多い。

³⁰ 王坦、宋宝和、上掲記事

A Study of the Introduction of the “3+X Examination Mode” in China

-Focusing on the Basic Ability Test in Shandong Province

Tian Shen

The Chinese University Entrance Examination System has experienced several stage large-scale reforms. And “3+X examination mode”, released in 1999, has received the enormous attention by setting topics set independently by provinces and established subjects flexibly.

During ten years after the implementation, various provinces have released their own test plans one after another. However, these plans mostly were the combination of compulsory subjects, and some elective subjects such as music, arts and P.E. which were not given importance. This has conflicted with the idea of “quality education”.

The Basic Ability Test, which was carried out in Shandong province in 2007, has alleviated this issue in a certain extent. It separated the “knowledge test” and the “ability test” for the first time, and also promoted the new curriculum of technology, physical education and health, art, integrated practice, humanities and social, science disciplines, which were six areas of the curriculum and learning standards in high school. The Basic Ability Test focused on the organic integration and internal links within different learning areas and different subjects connected to living and production, and it integrated a variety of basic knowledge, basic skills, learning ability, practical ability, emotional attitudes and values of students.

This paper, focusing on the Basic Ability Test, analyzed the project's background, current practical situation, the relationship between the Basic Ability Test and “quality education”, and finally its effectiveness of implementation.